



発行 一般社団法人 日本品質管理学会
東京都杉並区高円寺南1-2-1 日本科学技術連盟東高円寺ビル内
電話.03 (5378) 1506 FAX.03 (5378) 1507
ホームページ:www.jsqc.org/

CONTENTS

- 1-トピックス JSQC規格「プロセス保証とリスクマネジメントを統合し、より効果的な取り組みにするための指針」について
- 2-私の提言 マネジメントシステムと文化
- 2-ルポルタージュ 第151回クオリティークルボ
- 3-ルポルタージュ 第157回講演会ルポ
- 3-ルポルタージュ 第458回事業所見学会ルポ
- 4-総会告知/行事案内/教員募集/JSQC規格頒布/論文募集

JSQC規格「プロセス保証とリスクマネジメントを統合し、より効果的な取り組みにするための指針」について

原案作成委員会委員長 中條 武志

プロセス保証とリスクマネジメントの統合に関する推奨事項をまとめたJSQC-Std 52-001が発行されました。

規格開発のねらい

近年、事故・トラブル・不正の未然防止が重要な社会課題となっています。これに伴って、リスク情報の収集、リスクの特定・分析・評価、リスク対策・対応の計画と実施など、リスクマネジメントに取り組む組織が増えています。

他方、品質管理の分野では、プロセス重視の考え方の下、標準化、工程能力の調査・改善、トラブル予測・未然防止、検査・確認、異常の検出・処置など、プロセス保証の具体的な活動や手法が開発・実践されてきました。

しかし、事故・トラブル・不正の事例を見ると、両方の取り組みがばらばらに行われ、各々がその役割を十分果たしていない状況がうかがえます。リスクマネジメントでは、整備した仕組みが人の不適切な行動によって計画通り機能していない場合が見受けられますし、プロセス保証では、活動に必要な関係者の協力を引き出せず、部分的な取り組みで終わっている場合が少なくありません。

本規格は、プロセス保証とリスクマネジメントを統合し、相互に補完し合うより効果的な取り組みにするための推奨事項を定めたものです。ISO 9001などに基づいてマネジメン

トシステムを構築・運用しようとしている組織が、規格で求められるリスク及び機会への取り組みを具体化し、運用の有効性を高めるためにも活用できます。

開発から発行までの経緯

2023年、JSQC-TR 12-001「テクニカルレポート品質不正防止」の中で、RCA（根本原因分析）と共にリスクマネジメントが重要なポイントとして取り上げられたことを受け、標準委員会において検討が開始されました。

2024年に入り、標準委員会委員3人がJSQC規格「プロセス保証の指針」やJIS Q 2001「リスクマネジメントシステム構築のための指針」を参考に案を作成、これをもとに品質保証・リスクマネジメントの専門家10人からなる原案作成委員会が開催され（2025年5月～9月）、原案が完成しました。

その後、様々な分野の実務家を加えた審議委員会を開催（2025年12月～2026年3月）、パブリックコメント募集や集まったコメントに対する対応の議論を経て、最終案がまとまりました。

2026年5月8日、理事会でこの最終案が承認され、発行に至りました。

規格の内容

本規格の構成は、1章「適用範囲」、2章「引用規格」、3章「用語と定義」、4章「プロセス保証とリスクマネジメントの統合において基本となる考

え方」、5章「プロセス保証とリスクマネジメントを統合したマネジメントの進め方」、6章「プロセス保証とリスクマネジメントを統合したマネジメントの組織的な推進」となっています。

4章では、1)顧客・社会から求められていること、2)リスクを考慮する難しさ、3)リスクマネジメントとプロセス保証の役割、4)トラブル予測・未然防止の考え方、5)組織の外部からもたらされるリスクと組織内のプロセスから生じるリスク、6)起因事象に対する対策と緊急事態に対する対応など、基本となる事項について解説しています。

その上で5章では、統合マネジメントに関する方針の策定、計画の策定、実施、見直し・改善の4ステップに分け、リスク情報の収集、リスク特定・分析・評価、リスク対策・対応の計画、実施状況に関する事実・データの収集、有効性の評価などをどう進めるのがよいのかについて、具体的な方法や手法を示しながら詳しく解説しています。

最後の6章では、経営層の役割、推進組織、人材育成、リスクコミュニケーションなど、5章の取り組みを支援する上でのポイントをまとめています。

本規格が広く活用され、製品・サービスの質の向上、好ましい組織文化の醸成、TQM（総合的品質管理）の進化・発展に役立つことを期待しています。

● 私の提言 ●

マネジメントシステムと文化

元・食品安全マネジメント協会 亀山 嘉和

近年、ISO 9001をはじめとするマネジメントシステム規格において、形式的な仕組みの整備のみでは品質確保が困難であることが認識されている。

特に、不適合や不祥事の多くが規程未整備ではなく、運用・行動・意識の問題に起因しているといわれ、すなわち「文化」がシステムの有効性を左右するとの認識が高まった。

多様な人材で構成される組織ほど、共通の価値観の形成がマネジメントシステムの有効性を左右する。

従来、日本企業は独自の文化を形成してきたが、暗黙知や属人的運営への依存という課題も抱えていた。優良といわれ、また「品質を第一とする文化」

があったはずの日本企業でも品質不正が発生したことは残念なことであった。

文化は放置すれば維持されるものではなく、マネジメントシステムの中で継続的に確認・強化する必要があるのではないか。

それでは、今後、企業はどのように「文化」を醸成・維持していけばよいのであろうか。マネジメントシステムでいえば、「文化」は、組織の状況、リーダーシップ、認識・力量、パフォーマンス評価など、規格要求の根底に存在する概念である。したがって、文化は「規格要求の背後にある実効性の根拠」として考えるべきであろう。

具体的な対応策を次の4軸で考えて

はどうだろうか。

- ①リーダーシップ文化
品質優先の意思決定をしている
トップが品質に関与している
- ②組織行動・現場文化
不適合・問題が隠されていない
改善提案が活発である
- ③コミュニケーション文化
部門間で情報が共有されている
上下間に相互信頼感ができている
- ④学習・改善文化
継続的改善が実質的に機能している
失敗から学習している

マネジメントシステムの本質は、規格要求への適合そのものではなく、品質を重視する組織文化を維持・発展させることにより、組織の目的を達成することである。今後は「仕組みの運用」だけでなく、「文化の醸成」を評価・改善の対象として位置付けるべきではないだろうか。

第151回 クオリティーク ルポ

品質管理視点のデータサイエンス・AI ーなぜ今、品質管理でデータサイエンスなのか？ー

2026年5月13日、技建開発株式会社 教育センター長の和田尚之氏をゲストに第151回クオリティークがオンラインで開催され、生成AIとデータサイエンスの活用をテーマに講演が行われた。

本講演では、CPUとGPUの違いから始まり、AIの基礎概念や機械学習の位置づけについて説明が行われた。AIの本質は複雑な処理ではなく、パターン認識による分類と予測であることが強調された。品質管理においては、経験に基づく主観が重要である一方、基準を持ち客観的に判断する力が不可欠であることが示された。多次元で現象を捉えることで、表面に現れない要因を把握できる点は非常に示唆に富む内容であった。生成AIの活用方法としては、複数のAIを組み合わせることや、簡潔な指示によって分析やプログラム作成を進める手法が紹介された。Pythonと組み合わせることで、短期間の試行でも実用的な分析が可能となる

点が印象的であった。

質疑応答では、機械学習手法の選択に関する考え方が特に印象に残った。手法は多数存在し最適な選択は容易ではないが、目的を明確にした上で生成AIに候補を導かせる方が、結果として精度の高い分析につながる可能性が示された。生成AIの出力結果をそのまま受け入れるのではなく、自ら判断できる力を持つことの重要性も改めて認識した。分析結果は一度で完結するものではなく、結果を積み重ねて検証し、根拠として証明していく必要がある。こうした取り組みには、データや分析結果の可視化が重要であり、現象理解を深めるとともに、関係者への説明力向上にもつながると考えられる。生成AIは有能な支援ツールであるが、主体はあくまで人である。AIを活用しながら自ら考え判断する姿勢が求められる。

本講演を通じ、生成AIとデータサイエンスは品質管理の在り方を大きく変革しつつあり、重要なのは技術そのものではなく問題設定と活用力であると再認識した。今後は人とAIの役割を適切に組み合わせ、実務価値へつなげていくことが重要であると感じた。

池田 克之（ローム株）

第157回 講演会 ルポ

ソニーにおけるコトづくり ～人間中心設計によるUX 品質向上の取り組み～

2026年5月15日、中部支部第157回講演会が開催されました。講演①は寺山昌子氏（ソニー（株）品質CSセンターUX・ソフトウェア品質推進部）による「ソニーにおけるコトづくり」、講演②は加藤進也氏（同社エンタープライズソリューション事業部 商品部クライアントSW設計課）による「B2Bソリューションにおける人間中心設計（HCD:Human-Centered Design）の実践とビジネス経過」の2題でした。

①寺山氏は、顧客体験（UX）を品質の一要素と位置づけ、HCDの視点を商品化プロセスの中に組み入れたコトづくりの在り方を示されました。つくり手が充分価値があると考えたモノを世にだしても、ユーザーにとっては必ずしも価値あるモノとはならない、だから開発段階でHCDを導入すべき、とされました。

②加藤氏は、B2Bソリューションの現場でHCDを実

践し、UX品質向上とビジネス成果につなげた開発例として、座席管理ソリューションSEATouchを示されました。（SEATouchは交通系ICカード、電子マネーなどで幅広く使われています。）この利用者の中には視覚障害の方もおられ、HCDの観点から視覚障害のあるソニーグループの社員6名によるユーザーテストを実施し、スマホの読み上げ機能を利用して実際の利用状況を詳細に観察し、利用時にユーザーが遭遇する困りごとを抽出し、仕様に反映させることにより、視覚障害者のみならず、晴眼者にとってもより使いやすい座席管理システムができたこと報告されました。

モノづくりの根幹は顧客価値の創造であることを示されたと思います。つくり手が一方的な思い込みやひとりよがりにならないように、HCDを導入しユーザーにとっての価値を追求する商品開発の重要性が強調されました。

この講演会はオンラインで行われ、参加者は63名、会終了後のアンケート調査での満足度は4.8と高い評価が示されました。

齊藤 雅也（総合犬山中央病院）

第458回 事業所見学会 ルポ

ダイハツ工業(株) 本社 池田工場

2026年5月25日(月)午後、モノレール大阪空港駅に28名が集合しダイハツ工業様の送迎バスで約15分、猪名川に面し端から端まで車で10分かかる池田市ダイハツ町1番1号にある本社工場へ到着、晴れやかな笑顔で多くのスタッフ方に迎えていただいた。

今回は、Copen Factoryに象徴される「匠の技」視察とヒューモビリティワールドにみる「お客様に寄り添ったクルマづくり変遷」、そして兵庫県知事賞を受賞されたQCサークル優秀事例紹介を受けた。冒頭、グリーンソーカツサークル様の「食堂オートレジ清算漏れ0への挑戦」ご発表は圧巻だった。活動歴が浅いスタッフ部門でP管理図を活用し層別と粘り強い調査の元、的確に攻撃対象と真因に辿り着いていた。しかも上司の温かい支援があった。長く熱心に全社でQCサークル活動に取り組まれたからこそ、これだけの事例が生まれたものと、改めて強固な基盤を感じた。

いよいよ「匠の技」Copen製造工場へ、工場の扉が開くまでワクワクさせる演出で一層に胸が高まり、そ

こは「ここで働きたい!」と思うほど、整備された空間であった。「小さいからこそ出来ること」和軽・小型に特化し極めた姿をCopenに集結されており、選ばれし人財のみが働ける特別な場となっていた。少量生産のものづくりの中で、匠のメンバーが日々切磋琢磨することで人財育成にも貢献。本工場は少量生産の故、他の工場に比べ生産タクトは遅いと説明されたものの、熟練者が次々とボルトを打ち込むスピードに作業品質が心配になったが、熟練の作業とともに電子機器を活用したトレサビリティが保証できる仕組みがあった。是非弊社でも活用したい。

「お客様に寄り添い暮らしを豊かにする」企業理念の元、「わたしにダイハツメイ」と社内外へPRし苦難を乗り越えられ、お客様の生活環境と時代を先取りし「お客様指向」で、モノ・コトづくりを119年続けられた姿に、これからも社会に貢献し続ける確かさを感じた。ダイハツ工業の皆様、数々の感動をありがとうございました。



松岡 朝日子（株イトーキ）

第56回通常総会

日本品質管理学会第56回通常総会を下記のとおり開催いたします。

日 時：2026年11月14日(土) 10:00～11:00

場 所：慶應義塾大学 矢上キャンパス

行 事 案 内

●第153回クオリティトーク（東日本）

テーマ：品質管理のこれまでとこれから
ゲスト：山田 秀 氏

(JSQC会長／慶應義塾大学)

日 時：2026年9月8日(火)14:30～17:00

会 場：オンライン(Zoomミーティング)

詳細・申込：https://jsqc.org/153qtalk/

●第142回研究発表会（関西）

日 程：2026年9月17日(木)

会 場：関西学院大学 大阪梅田キャンパス

特別講演：工程能力指数の理論と実際、そして起源
永田 靖 氏（早稲田大学）

詳細・申込：https://jsqc.org/142technical/

●第56回年次大会（本部）発表募集

日 程：2026年11月14日(土)

会 場：慶應義塾大学 矢上キャンパス

(1) 申込期限

発表申込締切：9月23日(水)

予稿原稿締切：10月15日(木)必着

(2) 研究発表・事例発表の申込方法

https://jsqc.org/56annual_cfp/

●第461回事業所見学会（東日本）

テーマ：異分野・異業種をつなぐ技術拠点、最先端実験施設と歴史的建造物が共存する場にオープンイノベーションの仕組みを見る
ー「リアルファンタジー営業部」で見る、オープンイノベーションの現場・・・「マジンガーZ地下格納庫」を本気で設計した男が率いる、共創の技術拠点ー

日 時：2026年10月2日(金)13:30～17:00

※終了後、希望者による情報交換会を開催
見学先：前田建設工業(株) ICI総合センター

(茨城県取手市)

定 員：30名

※情報交換会は先着20名

※同業他社のお申し込みはご遠慮ください。

詳細・申込：https://jsqc.org/461visit/

●第56回年次大会（本部・神奈川）【予告】

日 程：2026年11月14日(土)

会 場：慶應義塾大学 矢上キャンパスプログラム：

11月14日(土)

午前 通常総会／各賞授与式

会長挨拶／新会長講演

午後 研究発表会

情報交換会／優秀発表賞表彰

事 務 局

JSQCホームページ：https://jsqc.org/

本 部：〒166-0003

東京都杉並区高円寺南1-2-1

日本科学技術連盟東高円寺ビル内

TEL：03-5378-1506

FAX：03-5378-1507

E-mail：jimukyoku@jsqc.org

中部支部：〒460-0008

名古屋市中区栄2-6-1

RT白川ビル7階

日本規格協会名古屋支部内

TEL：050-1742-6188

FAX：050-3535-8675

E-mail：nagoya51@jsa.or.jp

関西支部：〒530-0003

大阪市北区堂島2-4-27

JRWD堂島タワー11階

日本科学技術連盟内大阪事務所内

TEL：06-6341-4627

FAX：06-6341-4615

E-mail：kansai@jsqc.org

教員公募

職業能力開発総合大学校

募集人員 教授、准教授 又は 助教 複数名

所 属 職業能力開発総合大学校「企業経営」ユニットもしくは「品質管理・生産管理」ユニットのいずれか

研究分野 生産マネジメント・経営工学分野

(専門分野としては、生産管理、品質管理、工程改善、データ解析、物流・生産システム、経営管理、経営戦略、経営組織、経営情報等が該当します。)

担当科目 生産工学概論、生産管理、品質管理、経営管理などを予定

着任時期 2027年4月1日

応募締切 2026年9月24日(木)

詳 細 職業能力開発総合大学校 令和8年度教員公募
https://www.jeed.go.jp/jeed/recruit/aj91gk0000000iap.html

事務局からのお知らせ

JSQC規格頒布のお知らせ

この度、下記の成果がまとめられましたので、ご希望の会員の方に実費で頒布いたします。

JSQC規格 Std 52-001「プロセス保証とリスクマネジメントを統合しより効果的な取り組みにするための指針」

1. 申込方法：下記URLよりお申込みください。

詳細・申込先：https://jsqc.org/jsqcstd/

2. 資 料 代：1冊（A4判32頁）会員1,408円、非会員1,760円
（税込・送料別）

振込み先：一般社団法人 日本品質管理学会
三菱UFJ銀行 渋谷支店 普通預金 4313820

資料は入金を確認の上、送付いたします。

「品質」誌、投稿論文の募集！

会員の方々からの積極的な投稿をお勧めします。投稿区分は、報文、技術ノート、調査研究論文、応用研究論文、投稿論説、研究速報論文、クオリティレポート、レター、QCサロンです。

論文誌編集委員会